

～森の民話茶屋運営委員会～

『ふるさと民話とふるさと森をつないで…』

森の民話茶屋通信

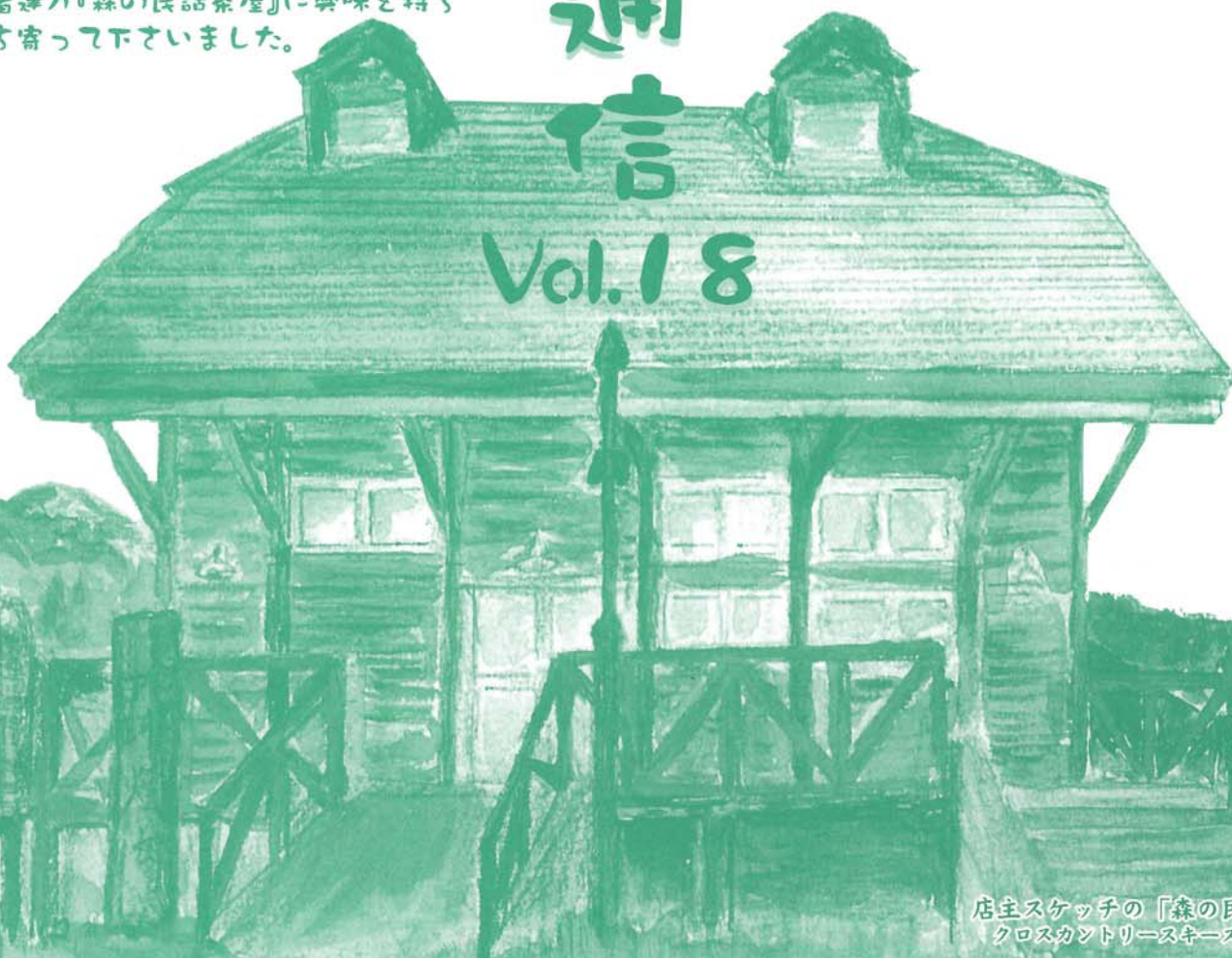
Vol.18



東京から、「田舎体験」で泊まっていた若者達が『森の民話茶屋』に興味を持ち立ち寄って下さいました。



今が今かと、オープン時間前にすでに大勢のお客さまが待っていて下さいました。



店主スケッチの「森の民話茶屋」
クロスカントリースキーステーション

発行責任者／森の民話茶屋店主 後藤みづほ
福島県安達郡大玉村玉井字前ヶ岳国有林7林班 Tel.0243-48-4648

『森の民話茶屋』五年目の日記から

今年は台風の上陸が過去最高、そして何とも大きな地震の発生と被災地の方々のご苦労は大変なこととお見舞いを申し上げます。幸いにも福島県は会津の方を除いて、大きな被害は無かったものの、農作物や果物への影響は少なくないと言うことです。

狙ったように同じようなコースで駆け上る台風の渦巻きや、地震発生に関しても、瞬時の情報をテレビで見ていると、人間の力など到底及ばない強大なエネルギーに圧倒される思いです。気象の専門家は、今年は海水の温度が高いので台風の勢力が強いまま上陸しているのだとか。地球環境、そして地球の内部にも何かの変化があるのでしょうか。

さて、そんな秋、お陰さまで『森の民話茶屋』も五年目を無事終えました。今年も四月二十九日から土・日・祝日に大勢のお客さまをお迎えすることが出来ました。毎回様々なエピソードに彩られた、楽しい店内の様子を思い出すままに日記風に記してみます。
(店主)

四月二十九日(祝)晴れ

いよいよ五年目のスタート。願ったとおりの快晴に恵まれ、再オープンのセレモニーを開始。村長さんが軽トラックを自ら運転して来て下さっているのを見て、お客さまから共感の声が上がります。

村長さんと議長さんの挨拶でスタッフ一同大いに励まされ、紅白の餅まきも一段と盛り上がる。餅はメンバーの添田さんが、いつも心を込めて作って下さる。

終了後、店内に入りきれないお客さまに「森を散策してから再来店を」とお願いするしかない状態に嬉しい悲鳴。

五月××日(祝)晴れ

昨日に引き続き、絶え間ないお客さまで満席。外のデッキにもお客さま。どうしても外のお客さまへの気遣いがおろそかになりがち。気を付けましょう。

民話「食わず女房」や、季節にふさわしい民話を楽しく聞いて頂く。



六月××日(日)曇り

JA郡山旅行センターからのお客さま方。農家のお嫁さんたちだが、会社勤めと農業を兼業している方々がほとんどとか。

民話を聞き、身につまされて泣き、笑い。

美味しい水で煎れたコーヒーや、抹茶、そして季節の地産地消、安全安心、美味三昧の四字熟語が勢ぞろいの『森の民話茶屋お嗜』に大満足の様子。

その後、岳温泉のホテルへ一泊とのことでした。



2才のおともだちも、楽しく聞きました。村保育所のスペシャルタイムで…。



今年もオープンいたします。気持ちもあらたに頑張ります！

六日×日(日)晴れ

FTV(福島テレビ)の取材、録画撮影。

突然の取材依頼は、県のサポート事業の成功例として広報番組で取り上げたい、とのこと。

営業日でないので、お客さま役もお願いして撮影。

マスコミの力は大きいので、出来るだけ依頼があれば受けさせて頂いているものの、いつも大変です。緊張性なんですよ、店主が。



六日××日(火)晴れ

今度はFCT(福島中央テレビ)の取材、録画撮影。

「ゴジてれ」の中の「ばんですシャトル」で、宮城県仙台とつないで情報をやり取りするコーナーで紹介すること。

キャスターの菅佐原さんが来店。お人柄の優しさがしみ出ていらつしやる。こうでないと二時間の生放送のキャスターは務まらないのだとつくづく感心する。

添田さん家の畑の茄子が、民話茶屋で素揚げされてお膳に並ぶまで、本物の材料とスタッフの調理の様子、それを又、管佐原さんがカメラの前で実に美味しそうに(本当に美味しいのです)食べて、「こんなのを食べていれば中性脂肪を気にしなくていいんだよねえ」と実感を込めて一言。



七日××日(日)晴れ

茶屋に家族連れの方、カッブルの方、女性たちのお客さまが圧倒的に多いのです。

この日、珍しくお爺さん二人がお出でになりました。年上の方がいろいろ楽しい話をして下さいます。郡山から来たこと、苦勞が実り、今は息子に譲り氣楽な九十二才だ…とのこと。えっ。九十二才? …お若い!

コーヒーが美味しいと褒めて頂いていると、福島からの家族四人が同じテーブルに。早速その中のお婆ちゃんに、先の九十二才のお爺さんが、「幾つだい?」と質問。「幾つに見えます?」と息子さんが代わって聞き返すと、「さうて…。」あと四年で大台です。』とのこと。「大台って?」と店主。「三桁。百才です。」えーっ!では九十六才?「家のお婆ちゃん、お化粧してますよ」とお嫁さん。元氣な先輩はみくんな素晴らしい。こうして一つのテーブルで偶然に様々な出会いが…。

埼玉県上尾市からお出かけ下さった、今年最後のお客さま。



二本松市から磐青の会(婦人教育リーダー)の方々。にこにこ笑顔です。



八月×日(日) 晴れ

夏休み最後のこの日、前日の夜に「フォレストパーク。あだたら」で民話語りの依頼があり、その折に「明日の森の民話茶屋には美味しい『安達太良高原そば』がありますよ」と宣伝にこれ務めて来たことや、スタッフがお声を掛けた方々が次々とご来店下さり、もう店内は凄い混雑。「そば」は直ぐにオーダーストップで心からお詫びを。

それにしてもカウンター内の調理場(?)が狭すぎて、下げた食器が洗えないのは本当に困りました。お客さまが「大変ですね」と声を掛けて下さる。

お客さまに気を使わせてしまうようなお店では失格だと思つづく思います。少し広くしたい調理場です。



九月××日(日)

雨のち曇りのち晴れ

遠藤ヶ滝不動尊の秋季例大祭の日、朝から雨。

つい先日、ラジオ福島から朝に電話があり、秋のお祭り情報番組に今年の春に全国放送用に制作した「水のある風景」(森の民話茶屋と安達太良の湧水)の中の一部、遠藤ヶ滝に触れた部分を再放送して良いか—との問い合わせ。「是非どうぞ」と答えはしたものの、具体的に何を話したか覚えていなかった。その日の放送を聞きました。そしたら何と、「護摩を焚きあげると小雨だったから雨が上がり、雨だったから小雨になるんですよ。不思議なんです。」と、店主が言っているではありませんか。ああ、今年のこの雨、止まないと嘘を言ったことになる…と心配、心痛。でも、本当に護摩供養の煙と炎が上がった時、物凄いい風で煙が舞った後に、何と雨が上がりましたよ。

やはり八百年信仰を集めるお不動さま。目撃した方、そうでしたよネ。

十月××日(日) 曇り

間もなく今年の事業が終了です。何年来の常連のお客さまが「そろそろ終わりがかなあ」と思っ来てましたよ。」とお出でになって下さいました。お客さまの多い日も、スタッフは大変ですが、この一言が喜びです。

今年最後のお客さまは埼玉県上尾市からの十一名の方々。東京の旅行会社を通してのご予約です。食事と民話をとの事でした。

この小さな森の民話茶屋が県内だけでなく、広範囲で大きな交流の場になれる兆しが見えてきたような五年目でした。

「継続は力なり」です。すべてお客さまと、応援して下さい。ありがとうございました。



雑誌「旅の手帖」の取材もありました。この記事を見て、遠くからお客様がいらして下さい。

これぞ日本のスローフード
森の民話茶屋
自家栽培の有機野菜を使った家庭料理が楽しめる。漬物や味噌など、すべてが手作り。その美味しさは一級品だ。地域の皆さんが協力して運営する店で、料理は自宅で下ごしらえしたものを持ち寄って提供する。1日3回開かれる民話ライブも楽しみ。
座安達太良大玉村玉井字前々岳御有林7林班 ☎0243・48・4648 開業10月26日までの土・日曜、祝日のみ 時10:30~16:30*福島民話ライブ11:00~、13:30~、14:30~ 東北自動車道本宮ICから約15km



お客様を、新鮮な食材・笑顔で、もてなしてくれるスタッフは茶屋の宝です。



民話は、大人も子供も、あつという間にその世界に引き込んでしまいます。

時間の長さと距離の長さ

『ふるさととは 遠くにおりて 思うもの そして 悲しく歌うもの』
作家で詩人の室生犀星の作品です。

ある日、新聞の切り抜きを片手に四人連れのお客さまがお見えになりました。かなりの年配の方々でした。

「ああ、来たい来たいと思っていただ。ながなが来らんがった。ようやく来れたー。」
「森の民話茶屋」の椅子に腰を下ろすや、感慨深げに店内を見回し、念願が叶ったという風情で嬉しそうに話されました。まるで「ふるさと」に帰った童子のように。

「あらあ、それはそれは遠かったですねえ…。」

私も調子を合わせて、時間の長さを距離の長さに置き換えて快活な声で挨拶をしたものです。感謝の気持ちで胸が震えるのを懸命に我慢した精一杯の下手な冗談でした。

本当に有難い、嬉しいことです。

車社会が当たり前になり、それぞれの行動半径の距離が延び、又、高度な情報化時代は小さな情報もあつと言う間に届く、時間的距離の短い時代になった反面、車を運転しない高齢の方々にとっては、この懐かしい「ふるさと」のような「森の民話茶屋」に行ってみたく…と、思いをつのらせながらも、なかなかお出掛けになる機会がなかったのでしょうか。そんな方々も以外に多いのでは…と思います。

こんな事があってから間もないある日、家族5人連れの方々がお見えになりました。聞けば何と、

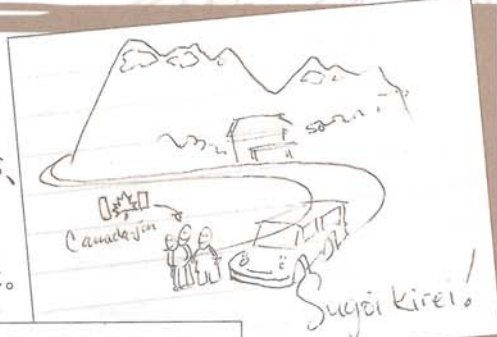
「今朝8時半に大阪空港を出て、福島空港から真っ直ぐレンタカーで来たんです。」とおっしゃるではありませんか。

さすがに驚いて「このお店を何で知ったのですか?」と感謝の挨拶よりも先に、畳みかけるように聞いてしまいました。

「旅の情報誌『るるぶ』で見たんですよ。実は父と母が会津出身なので、懐かしい方言を聞きたい…とばかり家族で出掛けて来たんです。」と老夫婦を見やりながら、娘さんご夫婦が話してくれました。会津弁ではないにしろ、いくつかの民話を語り始めるとそれはそれは懐かしそうに聞いて下さり、幼い頃の暮らしを思い出したのでしょうか、ポツリポツリと娘さんたちにふるさとの事や、分からないでいる方言の解説をして下さっているのです。ゆっくり食事を楽しんでお帰りになりました。

車社会どころではない、高速交通時代の距離感と情報化時代の瞬時の伝播力で、考えてもいなかった様々な出会いが、一方では可能な時代になったことも実感しながらお見送りしました。残されたメッセージノートには、イラスト入りの温かい文章が残されていました。

カナダから
いらした方が、
お友達と
来店して
下さいました。



「空っぽな茶屋、
この茶屋の 空っぽい
空に近づいて 心のうらみ
をいかに 空気が読み
取れるか 読み取れ
この茶屋の 心はこ
もつて 空気を伝えている
空に近づいて

詩人が残したメッセージ
です。

感想とかわいい
イラストを残して
行ってくれた
みほちゃん。



方言のこと

新聞の切り抜きを握りしめて訪ねて下さったお客さま、そして大阪からのお客さまにしても『森の民話茶屋』を訪ねて下さるお客さまのほとんどが、「方言」で語られる「民話」に「心のふるさと」を感じて帰って行かれます。それが共通語には無い方言の力なのでしょう。

東北の出身者の方々は、(大阪から飛行機でお越しの老夫婦の方も含めて)東北の訛りが恥ずかしい：(関西や以西の方言は大いばりなのに)：そんな「言葉」の偏見に苦勞したり、傷ついた

りした事があった筈です。『ズーズー』と、からかわれるのが嫌で、つい言葉を呑みこんでしまった経験も一度ならずあったのではないのでしょうか。

私の中学時代の国語の恩師が、「アクセントを直したい：という一心で、銀座の交差点に一日立っていた」と話していたのを思い出します。後に東京の小学校の教師を経て、教育評論家としてラジオの教育相談も務めたE先生のラジオから流れてくる言葉は、相変わらずアクセントやイントネーションが違う共通語だったのを覚えていますが：

でも、今はどうでしょう。東京のいわゆる『いなか』を持たない人たちが「脱都会」と田舎暮らしに憧れ、又、実際に田舎暮らしを始めた方々も多くなりました。「方言」を持たないと「語り部」にはなれないか？：と、学者を先頭に真剣な議論が巻き起こっているとも聞きました。

私たちは誇りを持って地元の方言で語り合いたいものです。そうだぞナイ！

花物語 はなものがたり

今年、店内を飾った季節の花々は、スタッフの鈴木イミ子さんが庭から持って来てくれたり、当番の方々が野山で摘んだ花を持ち寄ったりして、お客さまに楽しんで頂きました。又、土手の草刈りや花植えは、橋本文幸さんや福内ハルイさんが、汗を流して下さいました。

そして前庭や外のデッキのプラントーの花苗も近くの早福さんからのプレゼントだったり：と、皆様の温かい心の賜物ばかりでした。

そんな優しい心だけの茶屋なのに今年の春先、目を疑うような出来

事がありました。冬の間、店内に取り込んで大事にしていた寄せ植え鉢を、やつと春めいた三月末、もう大丈夫とデッキに出した日の翌日、水やりに行くのと何とほんの少し蕾の先が紫色になり始めた、たった一株のラベンダーだけが丸い穴を残してプラントーから消えていたのです。

園芸店で買えば百円か二百円で手に入る株です。ああ、この愛情溢れる茶屋から花を持ち去る人がいるなんて：残念！(ギター侍)



MAP

